

「小説家 渥美饒児の三島由紀夫コレクション展」始まる

6月1日から企画展「小説家 渥美饒児の三島由紀夫コレクション展」が始まりました。今回の展示は、浜松市在住の小説家、渥美饒児氏が30年以上かけて蒐集してきた三島由紀夫に関するコレクションの数々をご紹介します。

「三島の多面的なエンターティナーとしての人間性に感じるどころがあった。」と渥美氏自身が三島由紀夫に惹かれた要因を語っているように、彼のコレクションの幅は文学の面だけでなく、美的追求の面や衝撃的な最期に象徴される行動の面にも及び、三島のトータル的な人間理解を深めるのに役立つものと考えます。

また、渥美饒児氏自身のコーナーも設けてあります。ぜひご観覧ください。

【主な展示物】

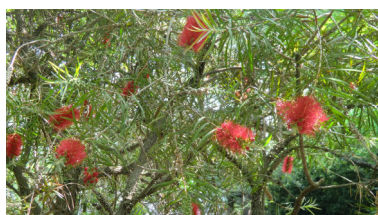
- ・三島由紀夫の自筆原稿
- ・書籍：初版本や限定サイン本
- ・映画「人斬り」に着用した衣装
- ・「新輯版 薔薇刑」
- ・決起当時の新聞記事や雑誌
- ・動 画
- ・渥美饒児の創作ノート 他



文芸館の四季

今年は5月28日に梅雨入りをしましたが、これは昨年比べて11日早いとのこと。「5月のうちに梅雨入りするとは珍しいものだ・・・」などと考えているうちに、5月だの6月だのと月に季節をあてはめて考えている自分に気がつきました。何と人間本意に考えていることか。

暦に関係なく自然の条件が整えば花は開く。それが何月であろうと・・・。



このところ展示の入れ替え等で余裕のない日が続きました。そんな私に頓着なく、駐車場のブラシノキはいつの間にか、あの学校の理科室を思い出させる花を咲かせており、「今日は少し蒸し暑いな」と感じた頃には、既に大きく開いたアジサイの花が、今ごろ気が付いたのかと言わんばかりに、目の前に現れました。

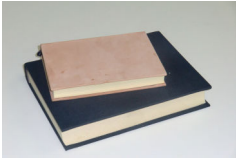


「忙」という漢字は「心が亡くなる」と書くと教わりましたが、心が亡くなると草花の変化にも疎くなるようです。

折角これだけ緑に囲まれた処にいるのだから、もっと自然に寄り添った思考回路をもちたいものだと反省させられました。

お知らせ

○梅雨に入って傘の忘れ物が多くなっています。お帰りの際は、傘に限らず忘れ物がなにかもう一度ご確認ください。



浜松文学紀行 17

瀧井孝作「気多川と天竜川」(昭和27年九月号「旅」)

昭和26年夏、釣り好きの瀧井孝作は、1年前浜松市東田町に眼科医院を開業した勝見次郎(藤枝静男)の招きで来浜。次郎らに迎えられ、バスに乗って鹿島橋で天竜川を渡り、気田川に沿って砂ぼこりの山道を登って行った。秋葉山の登り口の「坂下」で下車。九年前の山火事で秋葉神社が焼失したため、坂下はかつての賑わいはなかった。宿へ入ると、

宿の主人は裏の川で鮎釣をしてみると云はれ、私は、夕方五時でまだ明るいから、すぐに、携えてきた釣竿と工具箱と取り出して、川に行った。私は、釣場で四尾一尾もらって、岩淵の肩の荒瀬と流れこみの所で、つづけさまに六七尾、二十尾二十五尾位の鮎を釣った。つづけさまに釣れるので、皆は見物して、東京から上手な釣士がきたやうに、びっくりしていた。

鮎釣りで気分をよくした後の、鮎の煮びたしと塩焼きに大満足。その上「蚊帳もつらず、戸障子も開け放しで、離れの二階はしずかで、今晚は爽かな月夜で、窓から、山の上の月明りを看ながら眠った」ほど快適な鮎釣り第一夜が過ぎた。

翌朝7時、橋の下から出る筏に乗った。勝見院長は患者があるので橋の上から見送り、弟のSさんが世話役として同行した。筏からの風景は美しかったが、この日は昨日と違ってどこへ行っても不漁で、釣果は15尾ほどにすぎなかった。3日めは筏でずぶぬれになり、渡船で天竜川の雲名まで行ったが駄目だった。この夜は勝見邸に泊まった。

孝作が初めて勝見次郎と会ったのは、昭和3年の8月2日、奈良の志賀直哉邸訪問の際、直哉に紹介されてであった。次郎は第八高等学校2年に在学中で、かねてから慕っていた志賀直哉を初めて訪問したのであった。この日小林秀雄にも紹介されている。再会したのは、次郎が千葉大医科を卒業、孝作の住む八王子の倉田眼科の留守を預かることになった昭和11年である。次郎の八王子時代は1年にも満たなかったが、その間度々孝作を訪問している。今度の浜松行は、それからまた16年が経過していた。

「気多川と天竜川」では、案内してくれたのは「次郎と弟S」となっているが、藤枝静男の「瀧井孝作氏のこと」「瀧井さん」によると、釣り好きの妻の弟と「毎日筏に乗って山に入り、特有の柄の長い鎌を振るって山林の下刈りをする土地の男」の2人の若者を同行したとある。こちらが実際であったと思われる。しかし、静男は鮎釣りの年を27年と書いている。私見では静男の記憶違いのようだ。文中の気多川は「気田川」の誤りで、「けたがわ」と読む。

これが機縁となって、その後孝作は度々浜松を訪れるようになった。折柴の号を持ち俳人としても著名な彼を囲んで、浜松で度々句会も開かれている。相生垣瓜人や百合山羽公が参加したこともある。静男は俳句を作らなかった。